

## II. 米国のパフォーミング・アーツ分野におけるボランティア活動の実態

また、「スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター」では、年に何回か「サンキュー・ランチ」、「サンキュー・ディナー」、「サンキュー・ティー・パーティー」などのほか、ボランティアの家族も参加できる「ホリデイ・パーティー」を開催している。さらに、大きなイベントが終了した時点では、ボランティア・コーディネーターから「サンキュー・レター」が送られる。

「ケネディ・センター」でも、ボランティアと館側のスタッフが交流するために「ティー・パーティー」が開催されるが、毎年12月にはボランティアの感謝パーティーとして「ボランティア・リコグニション・ガラ」が開催される。そこでは、優秀な業績を残したボランティアに、その業績に応じて様々な表彰が行われるしくみになっており、その細かな規定はいかにも米国らしい\*<sup>3</sup>。「オープンハウス・フェスティバル」のボランティアには、ユニフォーム代わりに T シャツが無料配布されるほか、イベント終了後の“打ち上げパーティー”も開催される。

具体的な目に見える形での報酬よりも、ボランティアにとっては、自分の活動が施設の運営に役に立っているという実感が重要で、こうした館側からの感謝の意を表明することは、ボランティアの円滑な運営にとって重要なことだと考えられる。実際、「ボランティアにとっては、“Thank you!”と言ってもらうことが何よりの報酬」という声も聞かれた。

### (4) 問題点・課題

ボランティア運営に関する問題点や課題としては、各劇場から次のような事項が指摘された。

#### ● シンフォニー・スペース

- ・事務作業のアシスタントとして長期的なボランティア・スタッフが欲しいが、ある程度責任ある仕事を任せるとなると、今のように誰でもいいという訳にはいかない
- ・定期的にオフィスに通うということになると、自分の自由裁量の中で行動できる範囲を超えてしまうので、ボランティアの域を出てしまうことになる

#### ● スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター

- ・全米の傾向として、ボランティア人口が減少しており、ボランティアの平均年齢が年々高齢化している
- ・常に新しいボランティアを採用して140名を確保しないと、センターの運営が困難に直面する

#### ● ケネディ・センター

- ・ボランティアというものが「古い」風習と考えられつつあり、いかに若い層を取り込

\*<sup>3</sup> ①ボランティア・オブ・ザ・イヤー：長期に尽くした優れたボランティアを表彰、②プレジデント賞：ボランティア歴5年以内の人には表彰状、5年・10年・20年の人にはそれぞれ色違いのピンと表彰カップを進呈、③フレンズ・オブ・ライフ賞：15年以上勤務した人には名誉賞として表彰状、リコグニション・ガラへの生涯招待、フレンズ・スクリプトの生涯送付、ギフトショップの15%生涯割引(10ドル以上)が、それぞれ与えられる。

むかが課題

- 一般企業との連携・協力に基づいて、若いプロフェッショナル層のボランティアを採用していきたい

また、「メイヤーズ・ボランティア・アクション・センター」では、

- 昔のボランティアは職種にこだわらなかったが、最近では業務の内容によって満足・不満足の違いが出るようになった
- 昔のボランティアは「仕事を持たない人」が主力だったが、近年では働く人の参加が増えている
- 芸術団体のボランティアは、旧来アーティストが応募するケースが多かったが、近年は、ビジネスのオフィス環境で働いた経験のあるスタッフが求められることが多い
- 有給スタッフには、優秀なボランティアを導入することによって自分の地位が脅かされるのではないかと懸念する傾向があり、また実際に予算縮小のあおりから有給スタッフを削減してボランティアの労力でカバーする例もある

といった一般的な傾向や問題点も指摘された。

長い歴史を持つ米国のボランティアであるが、ボランティアに対する意識の変化、社会構造の変化から\*<sup>4</sup>、ボランティアの高齢化、ボランティア人口の減少などが問題となっているケースも多いようである。

---

\*<sup>4</sup> 具体的には、共働きの増加、レクリエーションの多様化、中産階級の生活の貧困化など、あるいは共働きや片親の増加から休日はできるだけ子どもと過ごそうという人が増えている、といったことによるボランティア人口の減少を指摘する人もいた。

\* なお、本章「米国のパフォーマンス・アーツ分野におけるボランティア活動の実態」の調査・分析は、Archi・Pel・a・go Co (NY) の協力を得て実施したものである。